

日本軍のルアンパバーン進駐

The invasion of the Japanese Army in Luang Pabang, Laos

菊池 陽子

Yoko Kikuchi

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨

During World War II, the Japanese army invaded Laos after “Meigo sakusen” on March 9, 1945. The period of Japanese rule in Laos was only five months, but after the surrender of Japan, the Lao Issara movement, also known as the Lao Independence movement, appeared. In the history of Laos, the period of Japanese rule is considered the period when changes occurred. However, there are only a few studies and documents from this period, so the details are not clear.

In this paper, I will examine the invasion of the Japanese Army in Luang Pabang mainly in accordance with documents from the Japanese side. These documents show that the Japanese army invaded Luang Pabang without engaging in a battle with France, obtained cooperation from the Lao side, was able to continue performing their war tasks, and did not intervene in the administration. However, it can be said that this is insufficient for illuminating the entire picture, it will be necessary to gather more documents and continue my study of this period.

キーワード：ラオス、ルアンパバーン、日本軍、明号作戦

Keywords: Laos, Luang Pabang, The Japanese Army, Meigo sakusen

はじめに

第二次世界大戦中のインドシナ（現在のベトナム、ラオス、カンボジア）は、東南アジアで唯一、1945年3月9日まで西欧の植民地政権である仏印政権が温存された地域であった。1940年9月の北部仏印進駐、1941年7月の南部仏印進駐によって、仏印に軍隊を進駐させた日本軍は、フランスの仏印における主権を維持しながら、南方作戦の「作戦基地・兵站基地」として重要な役割を果たしていた¹仏印を利用した。

この間、ベトナムやカンボジアと異なり、ラオスにおいては、「仏印武力処理」（明号



作戦)の準備のために部隊を移動させる 1945 年初頭まで、日本軍は進駐していなかった²。ラオスは、第二次世界大戦の最終段階までそれ以前と同様にフランス支配が継続しており、日本軍による支配は日本の敗戦によって第二次世界大戦が終結する約 5 か月間であった。ラオスは他の東南アジア地域に比べて日本による支配の時期が短く、さらにその時期は、敗戦の直前という時期であった。そのため、この時期のラオスに関する日本側の史資料は非常に限られており、研究も少ない。ラオスにおいても、現時点ではこの時期の史資料、研究ともにほとんどない³。具体的事実も明らかになっていないことが多い。

しかしながら、この時期は、スチュアート-フォックスが「日本による占領はごく短期間だったが、文化的ナショナリズムが政治性を帯びるための触媒になった」⁴と述べているように、主として欧米の研究者⁵に、ラオスの歴史にとってその後の変化を加速化させた時期であると捉えられている。また、イヴァーソンとゴーシャは日本による「仏印武力処理」が、ラオスの政治状況を劇的に変化させたと、この時期を大きな変化の時期であると捉えている⁶。この時期の日本による支配やラオスの状況が具体的に明らかになっている訳ではないが、いずれにしても、ラオスの歴史にとって歴史的な転換点であると認識されていると言ってよいであろう。確かに、日本の敗戦直後から、ラオスでは、ラオスの人々による独立運動、ラオ・イサラ運動が顕在化した。フランスの再占領によって、ラオ・イサラ運動はラオスでの活動が困難になったが、1975 年 12 月のラオス人民民主共和国成立にいたる「30 年に及ぶ闘争」の歴史の出発点であり、その間の主要な政治的指導者が一堂に会していたのがラオ・イサラ運動であった⁷。こうしたことから歴史的転換点とすることができると考えるが、ごく短い期間ではあっても、日本による支配の時期はいかなる時期であったのか、日本軍は具体的にラオスで何をしたのかを明らかにする作業は必要であろう。そうした作業の延長線上に、ラオ・イサラ運動の形成過程や活動の解明、ひいてはラオス独立運動やナショナリズムの解明の可能性が開けると考える。

こうした問題意識から、本稿では、これまでほとんど研究されてこなかった日本による支配の時期の一端を、ルアンパバーン⁸に限定して、主として日本の史資料から明らかにしたい。ルアンパバーンに限定するのは、日本軍はラオスの各地域に進駐したが、地域によって進駐した部隊が異なり、進駐の時期や期間、進駐した地域での活動などがかなり異なっていたからである。ラオスにおける日本支配について考察するには、ラオスの各地域の情報と具体的な事実を積み重ねていく必要があるのである。筆者は、ここ数年、本テーマに関して、日本での資料調査、ラオスでのインタビューを続けており、調査は現在も継続中である。本稿は、その中間報告である。

I. 日本側の資料による日本軍のルアンパバーン進駐

1. ルアンパバーンの武力処理

フランスはラオスを植民地にして以降、ルアンパバーン保護国とその他の直轄領に分けて統治した。かつてのルアンパバーン王国を存続させたまま、仏領ラオスの政治の中心をビエンチャンとし、ビエンチャンに理事長官府を置いた。つまり、ラオスの政治の中心と王都が異なっていた。1944年11月、インドシナ駐屯軍（同年12月20日より第38軍と改称）の司令官となった土橋勇逸は、1945年3月9日の明号作戦実施の前に、アンナン、カンボジア、ルアンパバーンの主権者に、日本による仏印武力処理後に、その理由や三国の独立などについて伝達する連絡者を派遣することを決めていた。ルアンパバーンには、ハノイの大使府から渡邊耐三領事を派遣することになっていた⁹。仏印武力処理後に三国を即時独立させることについて、外務省、大東亜省、陸海軍省間の意見が一致したのは、1945年2月26日の戦争指導会議に提出された「印度支那政務処理要項」においてであった¹⁰。そして、この間に、大使府職員の身分の問題も審議され、仏印武力処理の場合には、大使随員（総領事、領事等）は、その身分を保持したまま軍の囑託又は従軍文官として軍に協力することになった¹¹。

1945年3月9日、明号作戦が実行されると、ラオスにおいては、メコン川岸のビエンチャン、タケク、サワンナケート、パクセやシェンクワンと言った主要都市で、タイやベトナムから移動してきた部隊が武力処理を行った。その他の地域に関しては、主要都市を日本軍が占領してから、順次移動し、武力処理を行った。日本軍の兵力が十分ではなく、一度にラオス全土を武力処理することはできなかったからである¹²。前述のように、日本軍は仏印武力処理後に三国を即時独立させることを決定していたが、ベトナム、カンボジアと異なり、3月9日の時点で王都ルアンパバーンには日本軍が到達しておらず、武力処理が行われていなかった。

主要都市の武力処理後、当初の計画通り、渡邊領事がルアンパバーンに派遣された。渡邊領事は部隊に先立って派遣されており¹³、『戦史叢書 シッタナ・明号作戦』によれば、領事のルアンパバーン到着は3月20日頃で、領事はルアンパバーン国王に会い、日本軍による仏印武力処理のことを告げたが、国王は領事の言葉を信用しなかったとされている¹⁴。ルアンパバーンに到着してから部隊が来るまでの間の渡邊領事の行動、同行者の存在や領事の後に進駐した部隊でも困難であった道のりをどのような手段でルアンパバーンに到着したのか、ルアンパバーン王国の指導者たちとどのようなやり取りをしたのか等、詳細は不明である¹⁵。しかし、領事はフランス語が堪能であり、ルアンパバーン王国の指導者たちとの意思疎通には問題がなかったため、日本軍が仏印の武力処理をしなければならなかった理由、ルアンパバーンも日本軍による武力処理が行われること、日本軍はルアンパバーン王国を独立させる用意があること等を説明し、領事としての職務を果たしていたと考えられる¹⁶。

領事をルアンパバーンに派遣した一方、ハノイの第21師団司令部は、ビエンチャンを占領した歩兵第8連隊第3大隊（長：迫政則少佐）とベトナムのビンを占領した歩兵

第 83 連隊第 3 大隊（長：緒方廣業少佐）に、ルアンパバーン進駐を命令した。緒方大隊長は、戦後に記した回想録のなかで、2 部隊に命令が出されたことについて、作戦計画によるものか、アンナン山脈を横断する長路を考慮したものか、ラオス奥地の状況が不明であるための措置であったのか不明であると述べている¹⁷。この記述からは、2 部隊同時派遣が異例であること、当時のルアンパバーンに至るまでの状況について、ハノイの司令部でも十分に情報を持っていなかったことがうかがわれる。先に到着していた渡邊領事からもたらされた情報があったのかなかったのかも不明であるが、少なくともルアンパバーンに進駐した部隊には、事前に領事の情報は届いていなかった。

歩兵第 8 連隊第 3 大隊は 3 月下旬にビエンチャンからルアンパバーンに向けて進駐を開始し¹⁸、歩兵第 83 連隊第 3 大隊は 3 月 21 日にビンを出発した¹⁹。歩兵第 8 連隊第 3 大隊は、2 部隊にルアンパバーン武装処理の命令が出されていることは連絡を受けていたようである²⁰が、歩兵第 83 連隊第 3 大隊は 3 月 29 日あるいは 30 日になって、連隊本部から連絡を受けた²¹。しかし、両部隊間で連絡を取ることはできず、お互いにどのような状況で、どこまで部隊を進めているのかの情報を知らなかった²²。

以下、まず、歩兵第 83 連隊第 3 大隊の行動を緒方大隊長編集の回想録と『メモ』²³によってまとめる。上記大隊は、3 月 21 日、1.5 トン積トラックでビンを出発、7 号線を通って、24 日にベトナムからラオスに入った。24 日はノンヘット（ラオスのシェンクワン県）に宿泊した。ノンヘットには教会があったが信者の姿はなく²⁴、軍の駐屯地も残されており、フランス人がいたことを知った。25 日はサムヌアへ行く道とシェンクワン（現在のムアンクーン）へ行く道が交差する交通の要所であったバンバン（現在のシェンクワン県ムアンカム）に到着した。ここで現地の住民からフランス兵が出没し物品を強要するという話を聞き、さらにビンの連隊本部との無線電話での交信で、カンカイにおいて、シェンクワン駐屯の部隊がフランス兵を討伐中に戦死したとの報告を受けた。28 日、カンカイに到着したが、フランス兵とは遭遇しなかった。30 日にジャール平原西端のナムチャットに到着し、そこで、連隊本部から、歩兵第 8 連隊第 3 大隊がビエンチャンより北上中で、道路の交差するフーコン（プークーンのこと）で合流するようにと連絡があった²⁵。

31 日、フーコンに到着したが、歩兵第 8 連隊第 3 大隊の到着が確認されなかったもので、先に進んだ。途中、ミン川の支流にかかる橋がことごとくフランス兵によって破壊されていたため、補修をしながら進んだ。4 月 1 日の午前、ミン川の鉄橋に差し掛かった時、大音響とともに鉄橋が爆破され、対岸から自動小銃の一斉射撃を受けた。急いで応戦し、射撃を開始、歩兵は鉄橋両側から渡河攻撃を開始した。これとともに、対岸の山陰から自動車発信時の爆音が響き、敵の銃声が途絶えた。戦闘終了後、架橋作業を行い、シェンゲン（シェングンのこと）に到着した。そこで、再びフランス兵と交戦し、撃退後、宿泊した。ここで連隊本部から、ルアンパバーン入城の栄を歩兵第 8 連隊第 3 大隊に与えるように連絡があった。ルアンパバーンまで半日の行程に達していること、フランス兵との戦闘が続いたこと、加えて連隊本部からの要請を考慮し、4 日、水陸両

方の先遣隊を派遣した上で、シェンゲンを出発した。陸路の先遣隊はフランス兵に遭遇し、手榴弾戦となったが、フランス兵が退却し、夕方、ルアンパバーンを遠望する丘陵地に到着した²⁶。

5日朝、ルアンパバーンからやってきたラオス人と派遣した将校斥候から、仏印軍がすでに退却し、国王は健在との同じ情報がもたらされた。直ちに進駐は可能であったが、連隊本部からの要請もあり、待つことにした。待っていると、10時頃、ルアンパバーン方面から白旗を掲げた黒塗りの乗用車が向かってくるのが確認された。車内から現れたのは、単身、純白の上着、金ボタン、綿の半袴に黒の短靴の装いの明らかにラオスの高官と思われる使者であった²⁷。フランス語通訳を通して緒方連隊長と使者との間で話し合いが行われた。ラオスの使者は、日本軍のルアンパバーン到着を直前に知った国王から派遣されたこと、フランス軍はすでに兵舎を破壊し逃走しておりルアンパバーンには存在しないこと、ルアンパバーン市内は平穏で国王は王宮にて健在であり日本軍の進駐に備え待機していることを告げた。重ねて進駐時刻を尋ねられた緒方大隊長は、進駐を遅らせることはラオス側に誤解を与えることになるかと判断し、国王の健在を祝い、国王に使者の派遣を感謝した後、ルアンパバーン進駐の目的を述べ、15時以降に入城することを約束した²⁸。こうして、ルアンパバーンの武力処理は、フランス軍がすでになかったため、戦闘行為なしでの日本軍の進駐となった。

15時に進駐を開始した歩兵第83連隊第3大隊は、15時30分過ぎにルアンパバーンに到着し、16時に緒方大隊長は将校を伴い王宮に国王を表敬訪問した。国王は純白の麻織の上衣、絢爛絹の半袴、黒の短靴という正装で迎え入れ、長距離移動を労い、王都到着を感謝した。国王のラオス語は侍従がフランス語に訳し、そのフランス語を部隊の通訳官が日本語に訳した。20時頃、歩兵第8連隊第3大隊の迫大隊長が副官及び伝令とルアンパバーンに到着した²⁹ため、連隊本部に「共にルアンパバーンに無血入城」したことを報告した。これによって、ルアンパバーンにおける明号作戦は終了し、歩兵第83連隊第3大隊主力のみがルアンパバーン駐屯となり、その他の部隊は原所属への復帰やバンバンに戻り道路構築作業に従事することになった³⁰。

次に歩兵第8連隊第3大隊の行動を迫大隊長執筆の回想録によってまとめる。彼によると、ルアンパバーン攻撃にあたり、一番の心配事は、フランスがルアンパバーンを撤退しなければならなくなった場合に、国王を人質として連行してしまうのではないかとということであった。いかに国王を王都陥落前に無事救出してフランスの手に渡さないようにするのが課題であったと述べている。ルアンパバーンの状況がわからず、連絡も取れないなかで、ビエンチャンの現地指導者にルアンパバーン攻撃の目的と意義について説明すると、現地指導者は、王家の血筋に近いルアンパバーン出身者を4名選んで、国王宛の密書を持たせ、ルアンパバーンに向かわせた³¹。現地指導者とはだれであるのかは不明であるが、この記述通りだとすると、ビエンチャンの現地指導者はルアンパバーンの「独立」を事前に知っていたことになる。

密書が国王に届いたのかどうかかわからないまま、一部の残留部隊を残して、3月末、

ルアンパバーンに出発した。フランス軍は、ビエンチャンから撤退しながら、ルアンパバーンに至る道路を寸断し、橋梁を破壊していったため、それを直しながら進み、行軍速度は遅かった。連合軍の空襲にも悩まされた。ルアンパバーンの手前3キロの地点に到達したとき、別働部隊（緒方大隊長の歩兵第83連隊第3大隊）がルアンパバーンの東北から攻撃を開始していることを知り、協力して攻撃することを決定した。気がせい、副官、下士官、通訳を連れ、乗用車で部隊に先行してルアンパバーンに向かったが、1キロ行くと、道路が破壊されていて車は使用できず、徒歩で向かうことにした。現地兵の攻撃にもあったが、通訳の説得によって切り抜け、追いついた部隊と一緒にルアンパバーンに総攻撃をかけた。王宮を目指して前進し、門をくぐると国王や皇太子が出迎えてくれ、続いて渡邊領事と別働大隊長が入ってきた。ここにルアンパバーン攻撃は成功し、フランスを追い払うことができた。そして、翌日が記念すべき4月8日であった³²。

この回想録では、ルアンパバーンの武力処理は、文字通りフランス軍との戦闘によって行われたことになっており、歩兵第8連隊第3大隊がルアンパバーンに到着したのは、4月7日であるとされている。前述の緒方編の回想録と大きく異なっている。迫の回想録に記述された内容がすべて誤っているとは言えないし、内容の正誤をきちんと判断するための情報を十分持ち合わせている訳ではないが、緒方が10年の歳月をかけ、多くの部隊員の証言を集め、回想録にまとめていること³³、緒方編の回想録の他にも同じようにルアンパバーンに「無血入城」したことを記載している回想録が複数あること³⁴を考慮すると、緒方編の回想録との相違部分は、緒方編の回想録の内容がより事実を反映していると考えられる。迫はルアンパバーン到着の直前に行われたフランス兵との戦闘を、拡大解釈してしまったのではないだろうか。

一方、両部隊ともに、フランス軍が道路や橋を破壊していったために行軍に時間がかかったこと、逃亡フランス兵からの攻撃の危険性がある中で行軍したことは共通している。3月9日以降、ラオスでは、フランス兵が日本軍の進駐を前に逃亡、あるいは森に隠れるという状況が生じていた。ラオスにおいては全土一斉に武力処理を行えなかったことで、フランス兵に逃亡の時間を与えることになった。日本軍の兵力や移動の問題もあったが、逃亡フランス兵の存在も、ラオスにおける日本軍の進駐時期が各地で異なる要因となった。

2. ルアンパバーン王国の「独立」

フランス植民地政権が一掃されたルアンパバーンで、日本軍は予定通りルアンパバーン王国を「独立」させた。迫の回想録によると独立式典は4月8日、午前10時に始まり、独立すると、ラオス側が8条からなる憲法で独立ラオスの政体や国民を規定したとある³⁵が、この憲法については、迫の回想録にしか記載がなく、ラオス側がこの段階で憲法を制定したのかは不明である。迫は「独立」後、ビエンチャンに戻ることで、

その際にサイゴンへ行く皇太子を車に乗せ、ビエンチャンまで送った³⁶。

緒方編の回想録によると、国王は3月9日の日本軍による仏印武力処理について報告を受けていたが、半信半疑で、4月5日に日本軍がルアンパバーンに進駐してきて漸くその事実を認め8日に独立宣言を行ったとある³⁷。ベトナム、カンボジアとは異なり、これまで日本軍が駐屯していなかった地であったから、日本軍が本当にやってくるのか半信半疑であったであろうことは想像に難くない。渡邊領事の説明や、後述するように日本軍のルアンパバーン進駐以前にビエンチャンから戻ってきたペッサラート（当時のルアンパバーン王国副王兼首相）の言うことを、国王がいつどのように聞き、どのように事態を理解していったのかは不明である。緒方編回想録によると、ルアンパバーンに駐屯していた仏印軍は、3月9日から日本軍が進駐するまでの間に時間の猶予があったため、兵舎を完全に破壊し、兵器の大部分を持って北部に逃避した。破壊された仏印軍兵舎の写真が回想録に掲載されている。逃亡時に使用した車両は北部に向かう車道終点で多数爆破焼却されていた³⁸。仏印軍の逃亡という事実は、国王に日本軍の進駐が迫っていることを理解させた上で大きな出来事であったであろう。そして4月5日、日本軍が実際に進駐したことによって、フランスに代わって日本の支配を受け入れざるを得ないことを認識したと考えられる。

日本軍が「即時独立」の方針であった以上、国王には「独立」するのもしないのかの決定権はなかったはずである。現実を把握した国王にとって、「独立」は日本軍の方針に従っただけで、そうするより他に方法がないために選択したことであったであろう。しかし、ペッサラートは、結果的には上手くいかなかったが、この「独立」を、第二次世界大戦後、ラオス独立のために利用した。

緒方編回想録によると、4月8日、ルアンパバーン国王は、フランス・ラオス保護条約破棄宣言に続いて、独立を宣言した。この独立式典は日本側の助言によって、ラオス側が自主的に挙行了たものであった。独立式典は王宮の玄関で行われ、日本側からは領事、迫大隊長、緒方大隊長が陪席した。ラオス側からは、国王のほかに首相、侍従長（氏名が記されていないため、写真からは侍従長とは誰であるのか判明しない）、ビエンチャンから到着した諸官僚が出席した。王宮には、ラオスの官公吏、安南人、華僑、印度人、山間に居住する部族代表がそれぞれの民族衣装で集った。夜は市内のレストランで祝賀パーティーが催された³⁹。

独立式典の内容や形式において、どこまでが日本の助言でどこからがラオスが自主的に行ったのかははっきりしない。ただ、5日に日本軍が進駐し、8日に独立宣言という極めて限られた時間のなかで、日本軍にとって未知の地であったルアンパバーン⁴⁰において、国王や首相以外のラオス側参列者を指定できるほど、ルアンパバーンの情報を日本軍が持っていたとは考えにくい。事前に到着していた渡邊領事にしても、日本軍と状況はあまり異ならなかったのではないであろうか。政治の中心であったビエンチャンから官僚を呼び寄せ、様々な民族の代表者を参集させたということは、ラオス側の判断によるもので、こうした式典の開催はラオス側の協力がなければ無理であったことは確か

であろう。誰がどのように独立式典の参列者や内容を決定したのかがわかれば、ラオス側がこの「独立」をどのように捉えていたのかの一端が明らかにあると考えられるが、現時点では、それに関する資料はない。式典に参集したラオスの人々が、「独立」をどのように捉えていたのかについても知る術がない。

3. 日本軍によるルアンパバーン王国の支配

上記の「独立」後、『戦史叢書』によると、ルアンパバーン国王が「独立」後の処理について軍司令部の指示を受け、あわせてアンナン、カンボジアの状況を確認するため、皇太子と渡邊領事をサイゴンに派遣したとある。4月10日サイゴンに到着したとある⁴¹ので、おそらくルアンパバーンからビエンチャンまでは上述のビエンチャンへ戻る迫大隊長の車、その後は飛行機でサイゴンに向かったと考えられる。この皇太子のサイゴン行きに関しては、外務省外交史料館や防衛省防衛研究所等に関連する資料が現時点で一切見つからない。誰の指示によるサイゴン行きか、サイゴンでどのような指示を受けたのか等不明である。渡邊領事はサイゴンで皇太子と別れ、ハノイへ戻ったと考えられる。

皇太子は4月13日にサイゴンを出発して帰途についたが、この時、軍はサイゴンの民間飛行場長をしていた石橋健陸軍中佐が、武力処理後、非役となっていたので、司政官として彼を皇太子に同行させ、ルアンプラバン最高顧問とした⁴²。石橋本人は、土橋勇逸第38軍司令官が、彼をラオス政府最高顧問に任じ、サイゴンに来ていたサワンワッタナー皇太子と特別機でビエンチャンに赴任したと述べている⁴³。また、彼は、戦後、自身を、戦時中陸軍司政官、ラオス国の前身「ルアンプラバン王国」の最高顧問でビエンチャンに駐在したと紹介している⁴⁴。アンナン政府最高顧問には横山正幸元公使、カンボジア政府最高顧問には久保田貫一郎総領事と外交官が顧問として派遣された⁴⁵が、ルアンプラバン王国だけには、軍人が最高顧問として派遣された。どのような軍の意向があったのかははっきりしないが、石橋はサイゴンに来た皇太子とともにルアンプラバン最高顧問という役職名で、ビエンチャンに赴任した。現時点では、ビエンチャンでの彼に関する資料を探しだせていないため、ビエンチャンに赴任後の彼の任務については不明である。ただ、緒方編の回想録には、「日本の敗戦後、ビエンチャンの石橋顧問を長とする軍政部が引き揚げた」と記載されている⁴⁶ので、ラオス全体の統治に関しては石橋が責任を持っており、各地に駐屯していた軍はその指示を仰いでいたのではないであろうか。したがって、ルアンパバーンに駐屯していた緒方大隊長は、日本の戦争を遂行する任務が第一義であり、ルアンパバーンの統治に関しては、関与する必要がなかったのであろうと考えられる。

緒方編回想録によると、歩兵第83連隊第3大隊主力は、ルアンパバーン駐屯中、旧フランスの理事官舎を本部に、理事官舎左側の郵便局⁴⁷を兵舎とした。駐屯中の出来事としては、①明号作戦犠牲者の追悼法要、②ラオス正月、③天長節が記載されている。①は、日時は記載されていないが、ラオス政府はラオスの寺院で、安南人代表は安南人

居留民のための寺院で日本兵とともにいった。②は4月15日に、王宮で新年の儀が行われた。麻の白衣、絹の短袴、黒の長靴下、黒革靴の正装の官吏、背広姿の安南人、華僑、印度人が参集した。軍服姿の緒方大隊長はじめ日本兵が、王宮玄関で、国王、首相、侍従長らと写っている写真が掲載されている。儀式では読経の後、バシー（お祝い事や人生の節目に行う儀式）が行われた。バシーは日本人にとってラオス独自の儀礼として関心が高かったようで、詳しく記されている。象20頭を含む独立を祝うパレード⁴⁸が行われ、戦場とは思われない程の平穏なルアンパバーンであったそうである。③は4月29日に、緒方大隊長以下200名の兵士がルアンパバーンの広場で式典を行った。天長節にあたり、ラオス国王は特使を派遣し、連隊長、師団長に宛てたメッセージを大隊本部に持ってきた。さらに、ラオス官公吏、安南、華僑、印度居留民の代表も天長節の祝辞に大隊本部にやってきた⁴⁹。ルアンパバーン駐屯部隊は、ラオスの年中行事や儀礼、寺院に関しては何ら干渉しなかったと考えられる。

式典や儀礼に安南人が参加しているが、緒方大隊長はラオスにおけるベトナム人の地位について、『メモ』で「ラオスにとって見れば、安南人は外国人であり、ラオスで権威を振る人となっている。多年の佛領によって重要な職は皆安南人がおさえている。一般官吏にしても、又技術関係にしても安南人はラオスに対し、優秀民族と信じている。」⁵⁰と述べており、フランスの植民地支配から生じたラオス人とベトナム人の関係として理解していた。回想録には、「独立」後、ラオスでは安南人官吏を罷免し、居住する安南人を排斥したことが述べられており⁵¹、駐屯軍はルアンパバーンで行われていたこうした事態に対しては何ら関与していなかったことがうかがわれる。ルアンパバーンの「独立」政府が対日協力を続け、戦争遂行に支障がなければ、内政に関与する必要はなかったであろう。

第38軍は6月上旬に連合軍がインドシナに上陸した場合に備えた作戦計画を立てた⁵²が、沿岸部からインドシナに上陸された場合に備え、ラオスに後退して抗戦する準備をはじめた⁵³。日本軍にとって、ラオスは最後の拠点と想定されることになったのである。そのため、ラオスの対日協力の重要性がこれまで以上に増した。また、逃亡フランス兵の追討も続いていたので、日本軍は戦争遂行のための任務や活動に忙しく、ルアンパバーンの内政に関与する余裕もなかったと考えられる。

4月下旬に、北方からやってきたラオス人により、モンシン（ムアンシンのこと）で逃亡フランス兵を連合軍機が収容しているとの噂を聞いた緒方大隊長は、自ら討伐隊を組織して、4月30日にモンシンに向け出発している。噂は誇大と判明したが、メコン川上流の状況を調査して、6月上旬、ルアンパバーンに戻った⁵⁴。

この間、日時不明であるが、シェンクワンから田中情報班が移動してきて、北部ラオスの情報収集を始めた⁵⁵。5月末には、ルアンプラバン憲兵分隊新設要員として、ハイフォンから坂口俊夫少佐以下10余名が派遣され、6月1日から分隊の事務を開始した。当時のラオスは、逃亡したフランス軍兵士や一般のフランス人が山岳地帯に潜伏してゲリラ活動をするなど不穏な情勢にあったため、治安維持と情報収集の任務のために分隊

が派遣された。さらに分隊には、ラオス王朝首脳部の対日協力体制の推進強化と原住民の懐柔工作に努力することが求められた⁵⁶。ただ、当時のルアンパバーンの指導者たちの対日協力や現地住民の動向に関して、日本軍はそれほど心配していなかったようである。緒方大隊長は『メモ』において、「ルアンパバーンには、未だ越盟の勢力は大したことがないようだが、ビエンチャンではすでに入っているようで、時々うるさい問題が生じている⁵⁷。」と述べている。

8月、日本が降伏すると、ルアンプラバン憲兵分隊は8月20日までに重要書類を焼却し、全員メコン川を筏で下り、8号線を通してベトナムのタイビンに集結した⁵⁸。歩兵第83連隊第3大隊主力は、玉音放送が傍受できず、連隊本部からの打電で敗戦を確認した。日本敗戦後もルアンパバーンの治安は極めて良好であったが、ラオス王族の動揺が激しかったそうである。詳しい日程は不明であるが、ルアンパバーンから筏でビエンチャンに下り、さらに船でサワンナケート、サワンナケートからは9号線を徒歩で進み、連隊本部のある集結地、ビンへ向かった。ルアンパバーンからビンまで3週間を要した⁵⁹。

上記のことだけでこの時期の日本によるルアンパバーン支配を判断するのは、判断材料が乏しいと言われても仕方ない。しかし、判断材料がこれしかないとするならば、以下のように言えるのではないだろうか。ラオスにおける日本軍の支配の中心はビエンチャンにあった。ラオスのルアンパバーン駐屯軍の支配は、日本の戦争遂行が第一義であり、そのために現地の指導者の対日協力を必要とした。対日協力が確保されている限りにおいて、ルアンパバーンの内政に関与しようとはしなかった。ただし、フランス支配が一掃されたことで、ラオス人がこれまでになかった内政面での裁量権を持つことができるようになった。

II. ラオス側の資料による日本軍のルアンパバーン進駐

1. ラオス側の文献における日本軍のルアンパバーン進駐

ラオス語文献で、同時期の日本をどのように記述しているのかについては、すでに拙稿で論じた⁶⁰ので、ここでは、その中からルアンパバーンに関する記述を紹介する。日本軍のルアンパバーン進駐について記されているラオス語の文献には、①マハー・シラー・ウィーラウォンの『ペッサラート副王』⁶¹、②カムマン・ウォンコットラッタナ『ウンケーオ副王一族の歴史』⁶²がある。その他に、③英語に翻訳されたペッサラートの自伝⁶³がある。

①によると、1945年3月9日、日本軍がビエンチャンを占領した時に、ペッサラートはビエンチャンにいた。急いでルアンパバーンに戻ることにし、3月14日にルアンパバーンに到着した。ルアンパバーンに戻ると、役人を招集して状況説明のための会議を開いた。日本軍が到着したのは3月15日で、日本軍は到着すると、ルアンパバーン

王国の独立を宣言させるとの声明を出した。日本は独立の範囲をルアンパバーン王国に限定したので、ペッサラートはルアンパバーンに留まり、以前と同様に首相の地位を維持し、職務を遂行した。日本が戦争に負けるとビエンチャンに移動し、自由を取り戻すためにラオ・イサラと協力した⁶⁴。

日本軍がルアンパバーンに進駐した日は、緒方編回想録と異なるが、日本軍が進駐する前にペッサラートはビエンチャンからルアンパバーンに戻っていたことは確かであろう。そして、「独立」後のルアンパバーンで首相を務めた。

②によると、1945年4月5日、日本軍はルアンパバーン市内から1キロ離れたナールアン村までやってきた。14時、ペッサラート殿下は、暴力がなく平穏を維持できるように、ラオスの官僚機構、町や村が壊されることのないようにと2人の家臣と県知事、市長に命を下し、日本軍を迎えに行かせた。次の日の8時、王宮の前に白い傘のランサンの旗と並んで、日本の旗が掲げられた。シーサワンウォン国王陛下は、以下に述べるように、ルアンパバーン王国の独立を宣言した⁶⁵。

ここでの記述は、緒方編回想録と時間は異なっているが、日本軍進駐の日が一致している。緒方編回想録では、ラオス側が派遣してきた使者は国王から派遣されたことになっていたが、ここではペッサラートが派遣したことになっている。この相違は、ラオス側の文献は、ペッサラートに関するものだけであるので、常にペッサラートを中心に書かれているからであるとも言えるし、日本側がルアンパバーン王国内の権力構造を理解していなかったからであるとも言える。ルアンパバーン王国内で、国王、首相（ペッサラート）との間でどのような話し合いの末に使者が派遣されたのか、そこにどのように渡邊領事が関わっていたのかは、現時点では不明である。

③は、自伝とされているだけあって、最もこの間の状況を詳しく記している。マハー・シラー・ウィーラウォンはこの③の自伝をもとに①を書いているので、①に書かれていることは、③にも書かれている。

本書によると、フランス人は、ルアンパバーンから逃亡する際に、ペッサラートやその他の王族と一緒に逃げることを勧めた。しかし、ペッサラートはそれを拒否した。日本はラオスをフランスのくびきから解放し、ただフランス人を追い出すだけで、ラオス人には危害を加えないと思ったからである。ペッサラートは、日本の使節とラオスの独立宣言について協議をした。協議において、サワンワッタナー皇太子が、自分が独立を宣言することを提案してきたので、ペッサラートは、独立は政府の問題であるとそれを拒否した。しかし、皇太子はさらに抵抗したので、ペッサラート自らが独立を宣言するのではなく、国王が行うことになった⁶⁶。

独立後、皇太子は日本の使節と一緒にサイゴンに行くようにペッサラートに命じた。この間に皇太子がペッサラートにとって代わろうとしたからであるが、この試みは失敗し、国王は皇太子をサイゴンへ行かせた。その後、日本軍司令官の石橋中佐は、ルアンパバーンにやってきて、ラオス政府に武器と財政的支援を与えることに賛成した。石橋は国王に会って、皇太子が政府で活動を行うのは適切ではないことを話し、これ以降、

石橋は直接、ペッサラートに相談するようになった。日本は、ルアンパバーンの政府の仕事には関与しなかった。しかし、石橋は、ラオス南部を統一し一つのラオスとしたいというペッサラートの要求は受け入れなかった。日本の敗戦後、ペッサラートはビエンチャンへ行った⁶⁷。

ここには、日本という新たな権力者が登場したことで生じたペッサラートと皇太子の権力闘争、その結果、ペッサラートが勝利したことが述べられている。皇太子側の資料がないため、皇太子の思惑や、権力を掌握して何をしようとしていたのかなどはわからない。しかし、両者の権力闘争の勝敗を最終的に決定したのは石橋であり、それによってペッサラートはルアンパバーン王国内で実質的な政治的権力を握ることが可能になったと言えるだろう。日本軍は彼を利用し、彼は日本軍に協力することでルアンパバーンの首相としての地位を維持した。そして、彼が協力する限りにおいて、日本はルアンパバーンの内政に関与しなかった。ペッサラートの自伝には石橋の名前しか出てこない。日本軍のトップは石橋であり、ルアンパバーン王国の首相であるペッサラートが、ルアンパバーン王国以外を含むラオス全体を動かすには石橋の許可を必要としていた。日本はルアンパバーン王国を「独立」させたが、フランスの作った植民地ラオスの枠組みを取り払うことは考えていなかったのである。

2. ルアンパバーンの人々の記憶の中の日本軍

ルアンパバーンには、ごく少数であるが、進駐した日本軍について記憶している人々がいる。以下、紹介する。

S氏（1941年、ルアンパバーン生まれ、ルアンパバーン在住）は、日本軍はフランスと戦闘は行っていない。日本軍がしたことは、フランス兵を追い払ったということだけである。日本軍がやってきて変わったことは、それまでのルアンパバーンの旗は、三ツ頭の象の向かって左上にフランス国旗がついていたものであったが、それが取り除かれて、三ツ頭の象だけになったということくらいである⁶⁸。

V氏（1935年、ベトナムのニンビン生まれ、ルアンパバーン在住）は、ベトナム人で、父母がベトナムで農業をしていたが、土地を持っておらず非常に貧しかったので、ラオスに移住した人物である。ルアンパバーンでは、日本兵を見たことがある。実際に見たわけではなく聞いた話であるが、日本軍が来るという噂を聞いてフランス兵は逃げてしまったそうである。（彼は、日本軍が進駐してからルアンパバーンに移住した一筆者）シーサワンウォン王は日本軍と戦争をしたくなかったので、日本軍を受け入れることにした。そのため、侍従を日本兵のところへ送って、戦闘する意思はないこと、フランス兵はいないことを告げたのだと聞いた。日本軍はルアンパバーンでは戦闘をしていない。入ってきただけである。降伏後には引揚げてしまった。日本兵はバンガローのあたりにいた⁶⁹。（バンガローは当時のフランス人の邸宅のことをこう呼んでおり、ルアンパバーンでは、現在のプーシーホテル（郵便局の前）にあった。一筆者）

B 氏（1920 年、ルアンパバーン生まれ、ルアンパバーン在住）は、1945 年当時は出家して僧であった。ワット・セーンにいた。寺にいたため、日本兵のことはよく覚えていない。日本兵が自分たちで椰子の木に登って椰子の実を取っているのを見たことがある。カーン川で水浴びをしているのも見た。100 人以上はルアンパバーンにいたのではないかと思う。日本軍が入ってきてから、ラオス政府は日本兵の宿舎として、バーン・マーノのセナー・ウアン家の前（現在のルアンパバーン県森林局の所―筆者）に宿舎を建ててあげた。日本兵はそこにいた。現在は残っていない。ルアンパバーンに船に乗って入ってきた日本兵もいた。日本兵は寺院で寝ることはなかった。ラオスの寺院に対しては何もしなかった。特に命令することもなかった。日本兵が寺に来て拝んだことはある⁷⁰。

これらの語りに共通していることは、日本軍とフランス軍はルアンパバーンで戦闘を行っていないということである。S 氏は日本軍が進駐してきた時に 4 歳であるので、実際の見聞ではなく、年長者から聞いたことであろう。V 氏が聞いたという日本軍がルアンパバーンに進駐した時の話は、緒方編回想録に記されている記述と内容が似通っている。日本軍がいたという場所もほぼ回想録と同じである。B 氏の語りからは、日本軍は寺院、僧侶とはあまり関りを持たなかったことがうかがわれる。

短期間とはいえ、一度に 200 人余りの日本兵がルアンパバーンに駐屯したことは、ルアンパバーンの人々にとって、どのような経験であったのであろうか。すでに日本軍を記憶している人が少なく、語りの数が少ないため、断定はできないが、ルアンパバーンの人々にとって、ラオスを支配したという意味において、フランスも日本も同じであったのではないだろうか。

おわりに

限られた資料からの考察ではあるが、日本側とラオス側の資料を突き合わせると、以下のようなことが言えるであろう。日本軍のルアンパバーン進駐は 1945 年 4 月 5 日でフランス軍との交戦なしでの進駐であった。日本軍にとって戦争の遂行が第一義であったため、ルアンパバーン王国からの対日協力が得られる限りは、内政へは不干渉であった。日本軍はフランス植民地期からルアンパバーン王国の首相であったペッサラートを支持し、彼も日本に支持されることでかつてと同じ地位と権限を維持した。内政不干渉であったがゆえに、フランス権力が一掃された分、相対的に以前よりも大きな裁量権を彼が持つようになった。裁量権の許す限りで、彼は独自の政策を行うことも可能になった。それが、その後につながるこの時期の変化を生んだと考える。しかし、日本軍は、フランス植民地支配の枠組み自体を変えることはなかった。

本稿では、これまで収集した資料からの考察であるので、推測に頼る部分が多くなってしまったことは否めない。しかし、これまで言われてきたこの時代の変化の背景の一端を示すことができたように思う。ルアンパバーン以外の地域においても同じように情

報を積み重ねることで、ラオスという単位にした時、何かが見えてくるのではないかと考える。さらに、ルアンパバーンに関しても、本稿で明らかにできなかった事柄は多い。王国内の王家とペッサラートとの関係、ビエンチャンの日本軍司政官とルアンパバーン駐屯軍との関係、日本軍の現地での食料調達や人員確保の実態などについてである。日本軍はルアンパバーンまでの行軍中、ナイバーン（村長）の協力を得て、食事や宿泊所を確保し、道路や橋梁の補修にラオスの人々を動員している⁷¹。ルアンパバーンでの活動資金は、昭和通商が用意していたという噂⁷²もある。課題は尽きないが、今後も取り組んでいきたい。

謝辞：本稿執筆にあたっては、資料を提供していただき、お話をうかがわせていただいた緒方賢二様、北山俊男様、渡邊節子様、インタビューを取り次いで下さった渡邊貞様、ルアンパバーンでインタビューに応じて下さったラオスの方々、インタビュー時にご協力いただいたブンタウィー・ソーサムパン先生（Dr. Bounthavy Sosamphanh）に大変お世話になりました。ここにお礼申し上げます。なお本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）課題番号 25243007 平成 25～29 年度「第二次世界大戦期日本・仏印・ベトナム関係研究の集大成と新たな地平」（代表：白石昌也早稲田大学教授（現名誉教授））の研究成果の一部です。

注

- ¹ 波多野 1996 : 226
- ² 菊池 2013 : 77-78
- ³ この時期の日本を含むラオスに関する史資料と研究の状況に関しては、[菊池 2015 : 430-434] にまとめた。
- ⁴ スチュアート-フォックス 2010 : 93
- ⁵ Dommen. Arthur, Gunn. Geoffrey など
- ⁶ Iversson. and Goscha. 2007 : 65
- ⁷ スチュアート-フォックス 2010 : 100
- ⁸ 以下、回想録の表題等で「ルアンプラバン」と使用されている場合は、そのまま「ルアンプラバン」と記載するが、その他は、現在一般的に使用されている「ルアンパバーン」という表記を使用する。また、1941 年の東京条約後、ルアンパバーン王国はビエンチャン以北に領土が拡大されたが、本稿で対象としているルアンパバーンは拡大されたルアンパバーン王国ではなく、メコン川とカーン川に挟まれた狭義のルアンパバーンである。
- ⁹ 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 595、621 連絡者派遣を決めたのが明号作戦前のいつであるかは不明であるが、この時点では土橋は三国を武力処理後、即時独立させることは考えていなかった。
- ¹⁰ 波多野 1996 : 235
- ¹¹ 波多野 1996 : 236
- ¹² 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 604-607 日本軍の兵力は仏印軍推定兵力の二分の

一であった。

¹³ 後述のルアンパバーン進駐部隊の迫大隊長が記した回想録の記述によると、渡邊領事は歩兵第 83 連隊第 3 大隊と同行していたことになっている [迫 1964 : 116] が、緒方大隊長が記した回想録 [緒方 1982 : 536]、及び執筆にあたっての下書きメモ [緒方 不明] (緒方廣業氏ご子息、緒方賢二氏所蔵、以下『メモ』と記載する。) の写真キャプションから判断すると、部隊より先に渡邊領事がルアンパバーンに到着していたことが確認できる。また、歩兵第 83 連隊の辻確中隊長も渡邊領事が部隊より前にルアンパバーンに到着していたことを記録している [辻 1978 : 49]。

¹⁴ 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 646

¹⁵ 渡邊領事は、戦後、回想録や日記などを残さなかった。(渡邊耐三氏ご息女、渡邊節子氏のご教示による。2018 年 4 月 13 日 横浜)

¹⁶ 緒方 1982 : 536 このページの写真のキャプションに、「国王が明号作戦の報を在ビエンチャンの日本領事より聞き、」という記述があるが、当時、ビエンチャンには日本領事が存在しておらず、575 頁の写真に写っている領事は、渡邊領事に似ている (渡邊領事の写真は渡邊節子氏にご提供いただいた) ので、国王に説明していたのは渡邊領事であると考えられる。また、[辻 1978 : 49] には、領事が 3 月 20 日頃からルアンパバーンに来て、国王に説明をしていたことが記録されている。

¹⁷ 緒方 1982 : 522、[辻 1978 : 50-51] には、「距離から考えて、ビエンチャンからルアンプラバンに入城、王都を攻略、その後、緒方支隊と交替し、警備に当たらせるということではなかったか。」と述べられている。兵力は歩兵第 8 連隊第 3 大隊が約 450 名、歩兵第 83 連隊第 3 大隊が約 200 名、ビエンチャンからルアンパバーンまでの距離が約 250 キロ、ビンからルアンパバーンまでの距離が約 780 キロであることを考慮すると、司令部は辻の言うように考えていた可能性が高いと言える。

¹⁸ 迫 1964 : 117

¹⁹ 緒方 1982 : 522

²⁰ 迫 1964 : 116

²¹ 辻 1979 後述の緒方編回想録では 30 日になっている。

²² 緒方 1982 : 531

²³ 以下、回想録や『メモ』を使用する際には、原則として、そこで使用されている用語を使用して記述する。例えば、安南人はそのまま安南人のまま使用する。

²⁴ 『メモ』

²⁵ 緒方 1982 : 522-526

²⁶ 緒方 1982 : 527-533

²⁷ 辻 1979 では、「ラオス皇太子が王室車で連絡に来る」とあるが、緒方編回想録の写真に写っている使者は皇太子ではないので、緒方編回想録の記述通り、ラオス高官であろう。

²⁸ 緒方 1982 : 533-534

²⁹ ルアンパバーン直前で、逃亡フランス兵との間に大きな戦闘があったため、部隊が移動できず、大隊長だけ先にルアンパバーンに到着した。緒方 1982 : 537

³⁰ 緒方 1982 : 535-537

³¹ 迫 1964 : 114-115

³² 迫 1964 : 116-129

³³ 緒方賢二氏のご教示 (2018 年 7 月 3 日 東京) 及び『メモ』による。

³⁴ 北野 1988 : 87、南 1989 : 81 など

³⁵ 迫 1964 : 129-131

-
- 36 迫 1964 : 138-139
- 37 緒方 1982 : 575 前述した『戦史叢書』の記述と一致している。情報の出所が同一の可能性はある。
- 38 緒方 1982 : 541
- 39 緒方 1982 : 575
- 40 緒方 1982 : 526
- 41 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 646
- 42 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 646
- 43 石橋 1958 : 15
- 44 石橋 1956 : 77
- 45 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 647
- 46 緒方 1982 : 614
- 47 緒方 1982 : 538 の地図によると、理事官舎は現在、観光案内所となっている場所。郵便局は、現在もこの場所に郵便局がある。
- 48 独立のパレードと記載されているが、ルアンパバーンでは、ラオス正月の際にパレードが行われるので、独立のパレードであったのかどうかは疑問、例年行われているパレードであった可能性もある。
- 49 緒方 1982 : 539、576-579
- 50 『メモ』一部現代仮名遣いに改めた。
- 51 緒方 1982 : 559
- 52 緒方 1982 : 560
- 53 前田 1963 : 2
- 54 緒方 1982 : 580
- 55 緒方 1982 : 539
- 56 大島 1979 : 138
- 57 『メモ』
- 58 大島 1979 : 138
- 59 緒方 1982 : 614-616
- 60 菊池 2018 : 31-46
- 61 Maha Sila Viravong 1996
- 62 Khamman Vongkottrattana 1971
- 63 3349. 1978 本書はペッサラートが書いたとされる自伝の翻訳であるが、彼自身が書いたものかどうか疑わしい部分がある。本書の著者や性格については、訳者の紹介に詳しい。[3349. 1978 : xi-xii]
- 64 Sila Viravong 1996 : 76-77
- 65 Khamman 1971 : 61
- 66 3349. 1978 : 24-25
- 67 3349. 1978 : 25-26
- 68 2017 年 3 月 6 日 ルアンパバーン
- 69 2017 年 3 月 7 日 ルアンパバーン
- 70 2017 年 3 月 7 日 ルアンパバーン
- 71 緒方 1982 : 527-530
- 72 北村俊男氏のご教示による (2015 年 8 月 能美)

参考文献

(単行本)

- 大島親光発行責任. 1979. 『南方軍第一憲兵隊史』南一憲会 (非売品)
- 緒方廣業編. 1982. 『追想 歩兵第八十三聯隊』(非売品)
- 迫政則. 1964. 『ラオス独立の真相－「マ」号作戦始末記－』朝雲新聞社
- 波多野澄雄. 1996. 『太平洋戦争とアジア外交』東京大学出版会
- 防衛庁防衛研究所戦史室. 1969. 『戦史叢書 シッタナ・明号作戦』朝雲新聞社
- マーチン・スチュアート-フォックス. 菊池陽子=訳. 2010. 『ラオス史』めこん
- Khamman Vongkottrattana. 1971. *Phraratsapawat Wongwanghna Ratsatakun Chao Uparat Ounkaao* (『ウンケーオ副王一族の歴史』) Hosahmuthaengsat, Vientiane,
- Maha Sila Viravong, 1996. *Chao Maha Uparat Phetsarat* (『ペッサラート副王』)
- Kanakamakanwithanyasatsangkhom, Vientiane,
3349. translated by John B.Murdoch. 1978. *Iron Man of Laos Prince Phetsarath Ratanavongsa*, Cornell University, Ithaca,

(論文等)

- 石橋健. 1956. 「東南アジアシリーズ③ラオスという国」『実業展望 vol.18 no.6』実業展望社年 pp.76-77
- 石橋健. 1958. 「ラオスは赤化南漸の障壁たり得るか」『偕行 第 81 号』社団法人偕行社 pp.15-16
- 緒方廣業. 不明. 『追想 歩兵第八十三聯隊』下書きメモ
- 菊池陽子. 2013. 「ラオス・日本関係の一考察－第 2 次世界大戦期を中心に－」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』第 20 号 pp.75-87
- 菊池陽子. 2015. 「第二次世界大戦期の日本・ラオス関係に関する史資料の所在と研究状況」白石昌也編『第二次世界大戦期のインドシナ・タイ、そして日本・フランスに関する研究蓄積と一次資料の概観－研究のさらなる進展を目指して』早稲田大学アジア太平洋研究センター pp.430-434
- 菊池陽子. 2018. 「ラオス史の中の日本」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』第 31 号 pp.31-46

- 北野秀夫. 1988. 「ラオス・ルアンプラバンの詩情」 八三会金沢大会記念誌編集委員会『鏖痕―歩兵八十三連隊創設五十周年記念誌―』菱光社 p.87
- 辻確. 1978. 「打ち明け話」辻確編『天下の下士候 第1号』（歩兵第83聯隊昭和19年度下士官候補者隊同人誌）同釜会東京編集部
- 辻確. 1979. 「明号作戦・ルアンプラバン進駐の真相―戦史叢書 no32『シッタン・明号作戦』の訂正」（防衛省防衛研究所戦史室内資料）
- 前田雄二. 1963. 「集中營からコレラ船へ ハノイからの引き揚げ」波多博、座間勝平、折橋慶治、大川幸之助、福岡誠一、佐々木健児『報道報国の旗の下に 下 同盟通信社の思い出』新聞通信調査会 pp.1-8
- 南秀男. 1989. 「王都・ルアンプラバンへの道」山口千里編集『照隅録―歩兵八十三聯隊第十一中隊中隊誌―』八三戦友会（十一中隊）（会員頒布） pp.80-81
- Iversson, Soren and Goscha, Christopher E. 2007. “Prince Phetsarath (1890-1959): Nationalism and Royalty in the Making of Modern Laos”, *Journal of Southeast Asian Studies* 38:1 pp.55-81